医療史跡

イタイイタイ病と向き合った萩野 昇

イタイイタイ病（以下「イ病」）は，富山県の神通川流域で起きた日本の四大公害病の 1 つで，患者は出産経験者の女性が多く，腎障害が起こり，骨軟化症で骨がもろくなり骨折し「痛い，痛い」と言って寝たきりになることからこの名が付いたと言われている。この病気は，大正時代頃から発生し，三井金属鉱業神岡鉱山（岐阜県飛騨市）から排出されたカドミウムが神通川の水や流域を汚染し，この川水や汚染された農地に実った米等を通じて体内に入り引き起こされたことが証明されたのは 1960 年代に入ってからである。「水が白く濁って魚が浮くこともあった」等から，農漁業者は鉱山からの鉱毒との関係を早くから疑い抗議行動が行われていた。一方，同じ地域に発生したイ病については原因不明の風土病，あるいは“業病（ごうびょう）”，すなわち先祖の行いが悪かったからとされ，病気に苦しむ患者は二重の差別を受けた[1)]。

1955（昭和 30）年 8 月，患者の多くが集中していた婦中町（現富山市）の開業医の萩野昇（1915～1990 年）が執筆した，イ病を紹介する記事が富山新聞に掲載されたことから原因究明が始まった。萩野は，診察経験や患者発生地域分布等から 1957（昭和 32）年，富山県医学会で「鉱毒説（検証前の仮説）」を発表した。1960（昭和 35）年，農学者の吉岡金市（1902～1986 年）は，水田の米作被害とイ病につながりがあると考えた。一方，岡山大学の小林純（1909～2001 年）は，被害地域の飲料水，鉱山付近の河川水にカドミウムが含まれていることを分析していた。1961（昭和 36）年 1 月，患者の骨を詳しく定量分析し大量のカドミウムが骨に含まれている分析結果を得た。同年 5 月，富山新聞に小林のカドミウム原因説が掲載された。このような科学的証拠が検証されたにも関わらず，同年 6 月の第 34 回日本整形外科学会における萩野の学会発表では，イ病に特有な症状である腎障害と骨軟化症に進行する関係が解明されていないと反論されカドミウム原因説は認知されなかった。

1968（昭和 43）年 3 月，イ病第 1 次訴訟が提訴された。1968（昭和 43）年 5 月，厚生省の発表した「イ病は，神岡鉱山由来のカドミウムが主因である」との見解もあり，1972（昭和 47）年 8 月に訴訟は全面勝訴した。判決ではカドミウムの放流とイ病には因果関係があると断定し，患者に対する損害賠償と併せて，公害対策と汚染土壌の復元義務を内容とするものであった。第 2 次から第 7 次訴訟も和解し，1973（昭和 48）年に三井鉱山は医療保障協定に調印した。

写真 1　イタイイタイ病 闘いの顕彰碑（富山市婦中町萩島 清流会館）

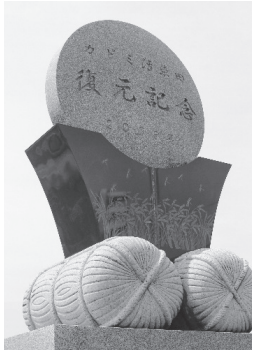

写真 2　カドミウム汚染田復元記念碑（富山市婦中町鵜坂）

裁判での勝利を記念してイ病対策協議会が 1976（昭和 51）年に設立した清流会館（富山市婦中町）には，イ病対策協議会結成 50 周年記念事業で建立された顕彰碑がある（**写真 1**）[2)]。土壌汚染については，1979（昭和 54）年から土壌復元事業が始まり，工法や費用の問題，農地転用の問題等の難問が山積みになって工事が遅れていたが，2012（平成 24）年 3 月に完了した（**写真 2**）。

イ病の被害は大きく深刻な公害病だったが，偏見や中傷に屈せず裁判を起こした原告を，萩野，吉岡，小林等が臨床的経過や科学的根拠を示して応援した。また，カドミウム土壌汚染の程度が強い地域ほどイ病被害者が多かった（量・反応関係）という疫学的因果関係が大きな決め手となった。2012（平成 24）年に開館した富山県立イタイイタイ病資料館では，解決に向けて 1 つの結論を見いだすことができたイ病の経緯を分かりやすく展示している[3)]。

参考資料

1）八田清信，死の川とたたかう　イタイイタイ病を追って（1983）
2）イタイイタイ病対策協議会 清流会館：https://ibyou-seiryu-kaikan.org/
3）富山県立イタイイタイ病資料館ホームページ：https://www.pref.toyama.jp/1021/iryofukushi/shisetsu043.html

（日本診療放射線技師会　諸澄邦彦）